



評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取り組み状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果(中間)	判定結果(最終)	今後の改善策		
①教育課程 学習指導	児童が「わかった」「できた」と実感できる授業の創造	学習指導要領を基に単元構想シートを作成し、ねらい達成にこだわった授業を展開する。学習評価表を活用し、児童の学習状況を見取り、授業改善につなげる。さらに、毎週(1, 2, 3年・4, 5, 6年隔週)「授業力向上研修会」を行い、単元構想シートや学習評価表等から一人一人の児童に力が付いたのか検証することで確実な授業改善につなげ、児童の確実な力の定着に取り組む。	教務主任 学力向上 担当	指導と評価の一体化に向けた単元を通じた授業づくりの取り組みが統一されていない。また、教師と児童間におけるねらいの共有も不十分であった。今年度は具体的な取り組みを通して、教師と児童が授業のねらいを共有し、わかったできた実感できる授業を行い、児童の確実な力の育成に取り組んでいく。	【努力目標】 単元構想シートと学習評価表を活用し、授業改善を行うことができた教員の割合が A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 70%以上80%未満 D: 70%未満	単元構想シートと学習評価表を活用し、授業改善を行うことができた教員の割合が A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 70%以上80%未満 D: 70%未満	7月と12月に教職員にアンケート実施	C	B	単元を通してのつけたい力や本時の目標達成を意識しながら授業づくりを行い、授業改善につなげることができた。来年度は今年度作成したシートをもとに、個別最適な学習と協働的な学習(令和型の授業構想)を行い、学習意欲の向上を基盤に学力向上に努めていく。		
	確実な学力向上	目標達成にこだわった授業を行い単元末テスト平均90点以上学校全体90%以上を目指す。また、単元末適応題として、学力調査問題に取り組み、授業改善を積み重ね、学力テスト(県平均+2ポイント)を目標に取り組む。今年度は一人一人の児童に力が付いたか具体的に検証し、授業改善につなげ、確実な学力向上につなげる。		昨年度は児童の学習状況について具体的な数値目標を設定しておらず、検証方法があいまいであった。今年度は児童の学習状況を具体的な数値で検証し、授業改善につなげ、確実な学力の向上につなげていく。	【成果指標】 単元末テストクラス平均: 90点以上の割合 【努力目標】 単元末適応題として学力調査問題を活用し、授業改善につなげることができた。	単元末テストクラス平均: 90点以上の割合 A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 70%以上80%未満 D: 70%未満 単元末適応題として学力調査問題を活用し、授業改善につなげることができた。 A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 70%以上80%未満 D: 70%未満	学期ごとにクラス平均点とその割合を検証	C	B	基礎基本の定着においては、学年間や教科間に差が見られた。来年度は日課表の大幅な見直しを行い放課後学習の時間を設定する。子ども一人一人と向き合い、基礎基本の定着と活発な力の育成、子どもとの信頼関係の構築を図り、学力向上につなげていく。		
	家庭学習の充実と定着を図る。	「分校小家庭学習のすすめ」「おススメ自学メニュー」を作成し、学校と家庭で連携を図ることで家庭学習の充実と定着を図る。	家庭学習の習慣が身に付いてきた児童が少しずつ増えてきた。さらに、「分校小家庭学習のすすめ」や「おススメ自学メニュー」を家庭と連携し共通理解を図り、充実を図る必要がある。	情報担当	家庭学習の習慣が身に付いてきた児童が少しずつ増えてきた。さらに、「分校小家庭学習のすすめ」や「おススメ自学メニュー」を家庭と連携し共通理解を図り、充実を図る必要がある。	【成果指標】 学年相応(学年×10分以上)の家庭学習の習慣が身に付いているか。	学年相応の家庭学習が身に付いている児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	各学期ごとに児童と教職員にアンケートを実施	B	B	家庭学習の習慣は身に付いているが、高学年になるにつれて(学年×10分+10分)の目安となる家庭学習の時間を達成できる児童が少なくなった。来年度は家庭学習で何を求めるのか共通理解を図り、児童が必要感を持って取り組める内容を考えていく。	
	ICTを活用して、思考を広げ、対話的な学びのある授業を実践する	ICTサポーターに、端末操作についての相談の場を設ける。総合的な学習の時間を中心に、児童の考えの共有場面での活用の実践をはかり、他教科でも実践を広げていく。毎月、校内研修を定期的に行い、授業実践の交流を図る	ICTを使った授業の実践はしているものの、例としては少なく、思考を広げ対話的な学びのある授業を行っているという点についてまだ不十分である		【成果指標】 ICTを使って、思考を広げ、対話的な学びのある授業を実践することができたか。 【満足度指標】 ICTを使った授業で、考えを深められたか。	目標達成に向けた授業を行うことができた教職員の割合が A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 70%以上80%未満 D: 70%未満 考えを深められたという児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に教職員と児童にアンケートを実施	A	A	教職員の意識として、ICT機器を使うことへの抵抗感が低くなってきている。児童もjamボードやスライドなどを使いながら自分の学習を進めたいスタイルが定着してきている。来年度以降も、児童教職員全体がICT機器を活用して学びを深めていけるよう、特にICT機器導入期である低学年における使い方を模索して実践していく。		
	思考の深まりが見られる道徳授業の推進	道徳の授業において、児童を引き込む中心発問と児童の考えが可視化された思考が深まる板書を意識し、思考の深まりのある授業を行う。	児童が考えたくなる中心発問や児童の考えが可視化された思考の深まる板書を工夫し、主体的に対話的な深い学びのある授業を行う。		道徳教育 推進教師	児童が考えたくなる中心発問や児童の考えが可視化された思考の深まる板書を工夫し、主体的に対話的な深い学びのある授業を行う。	【努力目標】 児童を引き込む中心発問と児童の思考が深まる板書を意識し、主体的に対話的な深い学びのある授業ができたか。	児童を引き込む中心発問や児童の思考が深まる板書を意識し、主体的に対話的な深い学びのある授業ができたか。 A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に教職員にアンケート実施	B	B	来年度も授業において、内容項目を学習指導要領解説から明確に設定し、児童を引き込む発問や児童の思考が深まる板書を意識した授業づくりや、主体的に対話的な深い学びのある授業を実践していく。
	読書活動の充実・質的向上	学年ごとに目標冊数を決め、進んで本を選んで読んだり、調べたりする読書活動を広げる工夫をする。	朝の時間に貸し出しをすることで、図書室に来る児童が増えてきている。読書に親しむ児童が増えてきたが、個人差がある。計画的に読書を奨励すると共に、学校司書と連携し読書の質を高めていく。		図書担当	朝の時間に貸し出しをすることで、図書室に来る児童が増えてきている。読書に親しむ児童が増えてきたが、個人差がある。計画的に読書を奨励すると共に、学校司書と連携し読書の質を高めていく。	【成果指標】 学期ごとに目標冊数を設定し、目標冊数の達成ができたかどうか。	学期の目標冊数を達成した児童の数が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に児童にアンケート実施	B	C	高学年は、自主的に図書室を利用するという習慣がなくなり、冊数が伸び悩む傾向がある。貸出冊数だけでは、読書量は測れないものではないが、図書委員会などの企画の時期等を見直し、魅力ある活動を展開する中で本離れに歯止めをかける必要があると感じる。
②生徒指導	いじめのない楽しい学校づくり	毎月の児童理解の会での情報共有及び教職員によるいじめチェック表の実施、年4回のいじめアンケートの活用などを通して、いじめの未然防止と早期発見・対応に努める。	生徒指導 主事	いじめは小さな芽で摘むという認識の下、いじめを認知した時は組織的に対応を行い、指導後も複数の教職員で見取りを行ってきた。どの学級にもいじめは発生するという認識で学級経営をしている。	【努力目標】 いじめの未然防止、早期発見・対応、事後の見取りに努めることができた教職員の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	いじめの未然防止、早期発見・対応、事後の見取りに努めることができた教職員の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に教職員にアンケート実施	B	B	来年度も、4回いじめアンケートを実施して、いじめの早期発見・早期対応に努める。児童の聞き取りは必ず全員懇談するようにする。また、引き続きいじめチェック表を活用して、職員全体でいじめの早期発見に努める。		
	自分から進んで元気に挨拶をする児童の育成	児童運営委員会を中心として、挨拶を奨励する活動を行う。		昨年度は新型コロナ対応の中で、できる範囲での挨拶運動を行ってきた。しかし、自分から進んで、気持ちのよいあいさつができる児童はまだ少なく感じる。	【成果指標】 自分から進んで挨拶ができたか。	自分から進んで挨拶ができていたと答えた児童が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に児童にアンケート実施	B	C	児童運営委員会を中心とした挨拶啓発がほとんどできなかった。あいさつを目標とするのではなく、「楽しい学校づくり」など設定を再検討する必要がある。		
③キャリア教育 進路指導	キャリア教育の推進	様々な学校行事を通して、社会貢献をする力を高め、自分の成長を実感できるようにする。	キャリア 教育担当	学校行事に進んで取り組むことができる児童が多い。キャリアパスポートを活用し、さらに、その中で身についたことを様々な授業や生活に生かせるようしている。	【成果指標】 様々な学校行事に主体的に取り組む、自分の成長を実感できたか。	様々な学校行事に進んで取り組み、自分が成長できたか答えた児童が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に児童と教職員にアンケート実施	A	B	キャリアパスポートの活用の仕方を、年度初めに職員全体で共有する。担任の負担にならない程度に、キャリアパスポートの記録をする。また、学校行事を目標とするのではなく、キャリア教育の目標に順次した目標を再設定する必要がある。		
④保健管理	規則正しい生活習慣の確立	規則正しく節度ある生活習慣の確立に向けて、児童健康委員会・母親委員会等と連携して啓発を行う。	保健主事 養護教諭	朝食の摂取率・栄養バランス、歯磨きについては改善されている。しかし、早寝早起き・メディアコントロールに関しては課題が見られる。特にメディア機器の使用時間・ルール設定・使用時の環境整備等について見直しが必要がある。	【成果指標】 児童と保護者が「早寝・早起き・朝ご飯」を実践しているか。また適切なルールを設定し、メディアコントロールができているか。	実践していると答えた児童と保護者が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に児童と保護者にアンケート実施 学期毎の生活リズムチェックカード	B	B	7・12月のアンケートを比較すると規則正しい生活習慣・メディア使用時のルール作りのどちらも結果が悪くなった。8月実施の生活リズムの取り組み状況は良好であるため、内容の見直しを行うとともに、定期的に見直しができる機会を設ける必要がある。		
	運動能力の向上	長休みの体力づくりや体育の授業を通して、運動能力、特に柔軟性の向上を図る。	体育担当	継続的に体力作りや学年の取り組みは行われているが、柔軟性や投能力に課題がある。令和元年度のスポーツテストでは全学年が柔軟性の県平均を下回っていた。ICT機器の活用、ストレッチししかわへの積極的な参加を通して、特に柔軟性の向上を目指す必要がある。	【成果指標】 体力づくりや体育の授業を通して柔軟性が向上し、県平均を上回ることができたか。	柔軟性が県平均を上回った児童が A: 70%以上 B: 60%以上 C: 50%以上 D: 50%未満	5月と11月に柔軟性の測定実施	B	B	計測対象を4・5・6年生とし、令和元年度の県平均と比較した。結果として男女合わせて40名(61%)が県平均を上回った。低下した児童も見受けられるため、今後も継続的な取り組みが必要だと考えられる。		
⑤安全管理	火災・不審者・地震津波を想定した避難訓練の実施	火災を想定したもの、不審者を想定したものの、地震・津波を想定したものをそれぞれ1回ずつ実施し、関係機関と緊密に連携していく。	教頭	消防署や警察署、こども園と連携をとり、児童の判断力や危機意識をさらに高める。引き渡しカードの見直しや引き渡し訓練の実施、危機管理マニュアルやアクションカードの見直しをしていく。	【成果指標】 児童自らが判断しなければならない避難訓練を実施し、実践的な成果があったと答えた教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	児童自らが判断しなければならない避難訓練を実施し、成果を出すことができたか。 A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に教職員にアンケート実施	B	B	こども園の連携や引き渡し訓練などは、コロナ禍でもあり、今年度もできなかった。職員の危機管理意識を高めるため、若プロなどで、共通理解を進めていきたい。		
⑥特別支援教育	児童の特性に寄り添った支援の組織的支援体制の確立	支援を必要とする児童及びその保護者に対して、校内支援委員会で児童の特性に寄り添った支援の在り方を検討し、組織的に支援に取り組む。	特別支援 教育コーディネーター	特別な支援の必要な児童及びその保護者に対して、校内支援委員会で児童の特性に寄り添った支援を検討し、専門機関とも連携して組織的に支援をしていく必要がある。	【努力目標】 支援を必要とする児童及びその保護者への支援について、児童の特性に寄り添い、組織的に支援することができたか。	支援の必要な児童及びその保護者に対し、組織的に支援できたか答えた教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に教職員にアンケート実施	B	A	特別支援学校の先生に実際に児童の様子を見てもらい、担任が具体的な指導を受ける時間を設定できた。今後も校内支援委員会や児童理解の場などで職員で児童の特性を共有し、組織として個に関わることができるようにしたい。		
⑦組織運営 業務改善	組織の活性化や効果的・効率的な業務改善を図る。	学校経営ビジョンの具現化に向けて、学校運営委員会やそれを支える分掌部会を充実させ、チーム学校で効果的・効率的に業務改善を進める。	教頭	若手が多く経験は浅いが、職員は協力的であり、組織的・効率的に動く意識は高い。経験の少なさをチームで動くことにより一人が抱える負担を少なくしていく必要がある。ICT利用による業務改善、文書の電子化を進めている。	【努力目標】 学校経営ビジョンを実現すべく組織的に動き、業務改善に努めたか。	組織的に動き、業務改善に努めたとする教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に教職員にアンケート実施	A	A	校務の中でのICT化が進み、業務改善がかなり進んできている。若い教職員が多く、教職員数も少ないが、組織的に動く意識は強いので、次年度もその流れを継続していきたい。		
⑧研修	校内研修に積極的に取り組み、国語科の授業改善に努める。	研究推進委員会を中心に、研究主題をもとに校内研修会や研究授業、授業交流を積極的に行い、授業改善に取り組む。	研究主任	国語を楽しんでいる児童が多く、意欲的に国語科の授業に取り組んでいるが、自分の考えを表現したり、条件に応じて書いたりすることに課題がある。昨年度までの実践を生かし、授業改善のための校内研修や研究授業を活用していく。	【努力目標】 積極的に校内研修、研究授業に取り組む、授業改善に努めることができたか。	積極的に校内研修、研究授業に取り組む、授業改善に努めることができた教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に教職員にアンケート実施	B	A	どの教職員も校内研修・研究授業・授業改善に積極的に取り組み、つけたい力を明確にし、児童の主体性を引き出す授業づくりへと抜本的な意識改革・授業改善を行うことができた。		
	若手教職員の早期育成を図る。	若プロを計画的に実施し、「チーム分校」で若手教職員を育てる。	若プロ コーディネーター	学級担任すべてが、若プロ対象者である。早期に若手教職員の人材育成をしていくことが重要課題であり、計画的に進めていく必要がある。	【満足度指標】 若プロを受け、身に付けるべき資質能力を身に付けることができた教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	若プロを受け、身に付けるべき資質能力を身に付けることができた教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に教職員にアンケート実施	B	A	それぞれの主任が中心となって研修を行い、資質能力の向上に努めることができた。「全教職員一人一人がメンター」としての自覚を持ち発信することで高め合う職場環境づくりを継続して行ってきたい。		
⑨保護者 地域との連携	学校の情報を提供する開かれた学校をめざし、信頼される学校をつくる。	学校だより、学年便り等各種便り、ホームページ等で学校や児童の様子を知らせ、タイムリーで有効な情報提供を行う。	教頭	学校だより、ほけん便り、図書便りは定期的に発行されている。学年便りは、担任によってばらつきがあるが、ホームページなどで学年の取り組みなどを紹介している。ホームページに様々な役立つ情報を載せ、関心をもってもらう必要がある。	【満足度指標】 学校だより、学年便り等各種便り、ホームページ等を活用し、保護者が知りたい情報を提供したか。	学校の様子がよく分かったと感じている保護者が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に保護者にアンケート実施	A	A	今年度同様、ホームページの更新はできる限りの範囲で行うようにする。さらに地域の方や保護者の方に関心を持っていただけるような情報を提供していきたい。		
⑩教育環境 整備	児童が安全で安心して学校生活を送れるよう校舎内外の環境整備に努める。	日常的に整理、片付けを意識し、校舎内の環境整備に努める。毎月の管理場所の安全点検を通して、不備な箇所の施設の修繕を行う。	教頭	毎月の安全点検と早期の修繕を実施しているが、校舎の老朽化に伴い、恒常的に不良箇所が発生している。	【努力目標】 毎月、各管理責任者が安全点検を実施し、安全の確保と環境の整備に努めたか。	安全確保に努め、校内外の環境整備に取り組むことができた教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	毎月の安全点検と7・12月に教職員にアンケート実施	B	B	安全点検の回数を減らしていくが、安全の確保と環境の整備には、常日頃から気をつけていく意識は職員には持たせていく。施設の老朽化には、今後とも市に働きかけていく。		

学校関係者評価  
 ・コロナ禍で、様々な面で学校運営に支障が出て、ご苦労があったと思われる。そんな中、できる限りの対応をとっていただいたことに感謝申し上げます。特に、コロナウイルス感染症対策におけるリモート授業については、児童の安全面への配慮とともに学習保障もされているので、大変なことではあるが、今後も臨機応変に対応してほしい。  
 ・ここ2年間、地域と学校との交流ができていない状況ではあるが、これで疎遠になってしまうのではなく、以前行っていた文化祭などの行事は、コロナの状況などを見定めた上で、地域としては復活されることが望まれる。  
 ・通学路の歩道の拡幅や雪道の通学路の安全確保については、地域としても学校と連携して協力を惜しまない。今後も運動場の整備などでお手伝いすることがあれば、相談してほしい。